

日本海における春大羽いわし漁況予報は、実施以来、9年の才月を重ねている。この間、関係機関の不断の努力によつて漁民に、行政面に重要な役割を果し、また、五カ年にはたつて行なわれた対馬暖流開発調査や本年より実施されている漁況海況予報調査の強力な支柱となつてゐる。

しかし、このように一見、非常に高度な技術を要する問題を、立派に軌道に乗せて運転しているようであるが、あくまで予報である以上、或程度の危険率をもつことは、充分銘記しておかなければならぬ。若し予報の経過を、かえりみて、そこに狂いを見出しがなければ、その予報は、確立された法則であつて、予報の範ちゆうから除かれる性質のものではないだらうか。すな

むち、漁況予報に対する基本的な考え方と、一方、部分的な予報も、暖流の流路、勢力によつて樹てられているが、これは石川

## 日本海

日本海区における春大羽いわし漁況予報は、実施以来、9年の才月を重ねている。この間、関係機関の不断の努力によつて漁民に、行政面に重要な役割を果し、また、五カ年にはたつて行なわれた対馬暖流開発調査や本年より実施されている漁況海況予報調査の強力な支柱となつてゐる。

しかし、このように一見、非常に高度な技術を要する問題を、立派に軌道に乗せて運転しているようであるが、あくまで予報である以上、或程度の危険率をもつことは、充分銘記しておかなければならぬ。若し予報の経過を、かえりみて、そこに狂いを見出しがなければ、その予報は、確立された法則であつて、予報の範ちゆうから除かれる性質のものではないだらうか。すな

むち、漁況予報に対する基本的な考え方と、一方、部分的な予報も、暖流の流路、勢

内橋潔

## 漁況予報を回顧して

## 今春の日本海北区大羽いわし



発行所  
新潟市万代島  
日本海区水産研究所  
印刷所  
株式会社第一印刷所

## —第89号—

## 特集 昭和33年春季大羽いわし漁況予報の回顧

- 日本海
- 石川県の場合
- 日本海西部の場合
- 年令構成と魚体
- 日水研研究討論会
- 魚探

点が移つてゐる。

(日水研)

次表は、農林統計による、流刺網(4・5・6月)漁業の、まいわし・うるめいわしの漁獲量年変化を示している。全体として見ると、昭和29年を頂点として漸減し、近年は、青森・秋田の北方に重

日本海区における  
大羽いわし漁獲量の変遷

(日本海区水産研究所所長)

(単位 千貫)

県名	年	1952	1953	1954	1955	1956	1957	1958	平均
青森	県	28	80	0	931	1,140	1,158	463	543
秋田	県	791	362	1,048	926	545	1,210	450	762
山形	県	496	230	1,637	1,219	255	103	89	576
福島	県	965	1,246	3,895	1,884	406	323	56	1,254
新潟	県	4,372	5,135	3,018	3,022	3,009	2,652	2,220	3,347
計		6,652	7,053	9,598	7,982	5,355	5,446	3,278	6,553

但し 1958年分は概算である。また青森は日本海側の漁獲。



(今春の大羽いわし)

## 年令構成と魚体について

春期来游する大羽いわしの漁況如何によつてその年の漁家の経済が左右されるといふほど北部日本海沿岸漁民にとつていわし流刺網漁業は極めて依存度の高い漁業の一つである。

さて、今年の資源的に見た、大羽いわしの予想として「日本海北区全域を考へた場合、二年前の稚魚出現量、当才魚の漁獲量および大羽いわしの経年的生残率から計算しても、資源的に昨年より悪い条件はない。そして地域的配分は海況に支配されるので言及はできない」とした。

実際の漁獲量は石川県下では総尾数では昨年以上であつたが漁獲頭数では平年並であり、新潟、山形県では昨年同様の大不漁秋田、青森西岸では昨年より下廻り、結果的には日本海北区全体として、昨年より不振であった。この原因が資源面にあるか、環境面・利用度等にあるか、充分分離して説明することはできない。

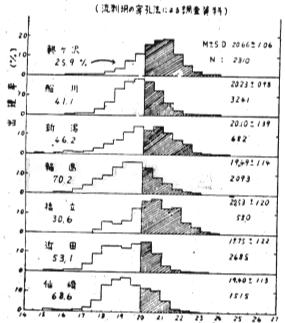
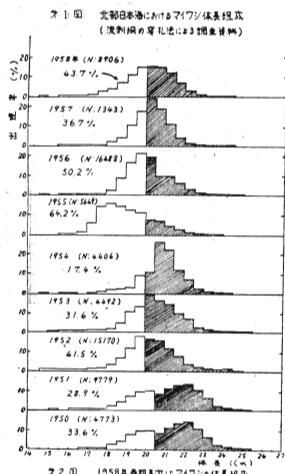
一方、今春の来游群の年令構成及び魚体について果して予想通りであつたかどうかという点である。また、年令査定及び漁獲不備な資料であるが一応穿孔法による体長組成から一九五〇、五一年を二〇・四種、一九五二年以降を一九・九種以下の小型魚を一応の二才魚の出現量の目安として推定してみた。第一図に示すように今年の出現

量は小型魚（二才魚）が四三・七%で主体を占め、昨年より僅か多く、体長組成の分布型及び小型魚の出現率はほぼ一九五二年と類似している。また、これを地域別にみると（第二図）かなりの地域的変動を示している。すなわち、山口、島根県沿岸では例年のように小型魚の出現量が多く、同じ石川県下の加賀の橋立のものと能登輪島の体長組成は明らかに異つている。橋立の標本サンプリングについて今後検討する必要があるが、前者は大型魚（三、四才魚）が後者は小型魚（二才魚）の出現量が目出つてゐる。また、新潟、秋田沿岸ではやはり小型魚が主体をなしてゐるのに対し青森県西岸では三、四才魚を主体とした大型魚が昨年以上出現し、加賀海区を除く各地域のものと著しくその様相を異にしている。

次に、今春注目されることは能登西岸に来游した同じ二才魚群と推定される小型魚の中で一九・〇種前後とする成長度のよい群と、十七・八種の成長度の劣るいわし群が見られ、成長度の劣る小型群が一九五五年ほどではないがその出現量が目出つたことである。これらの二群はおそらく発生時期の相違に基因する成長の差と考えられるが、若しそうだとすると日本海地方水域の産卵に由來する群が二才魚としてかなり日本海全域に補給されていることも考えられ

る。

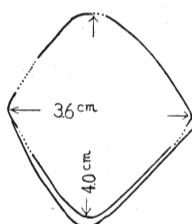
（日本水研資源部 渡辺技官）



拾得率が高い。それに比例して報告されるはがきの中で損傷しているものも多くなつていて、それはがきの端がボロボロに切れているのは、波打ぎまでの摩擦による損傷であり、点々と針穴状のあら傷は海鳥のいたずらと想像される。しかし、鋭利な刀型で切り取られた如き傷のあるものについてはその原因は謎である。よくみると、謎の封筒は冬季五島列島西方十五し三十マイル附近で投入したものに限られており、傷の大きさはややまちまちであるが、その型は菱状で同一である。

今春イワシ調査のため、能登の輪島を根拠にし、ここに約五十日滞在していだ。船内の食事でイワシがそろそろあきらめはじめた頃、ある日、充满した卵巣の中での損傷のことである。

早速フグの口を開け、二つ折りにした紙を中に入れて歯型をとつてみた。まさしく封筒の破損の型とこのフグの歯型とは同型であることが解った。間違いはない。約四ヶ月にわたつた謎もとんでもなく解つた。そこで発見でき長崎の仇ではち切れんばかりのフグが五尾程船に持ち運ばれた。フグが料理されるのを横で眺めていたところ、たまたま切り捨てられた頭をみて想い出したのが海流封筒



今年はボリ

エチレン製の封筒を使用して眺めていたところ、たまたま切り捨てられた頭をみて想い出したのが海流封筒

で、ではち切れんばかりのフグが五尾程船に持ち運ばれた。フグが料理されるのを横

で眺めていたところ、たまたま切り捨てられた頭をみて想い出したのが海流封筒

## 魚探

海流封筒の謎？ あつたことは一入。今さらながら、下関、九州方面がフグ料理の本場であることを思ふ。今、このフグの上下の各類に二個並んだ鋭い歯相？ を眺めてみてその強靭さに恐れ入つてゐる次第である。

このフグを持ち帰り後日調べたところでは、トラフグであり、他にゴマフグについても、その歯型を実験してみたが型は多少平たくトラフグとは異つており、トラフグであることがあらためて実証された。

（日本水研資源部 答原）

